



ロジエステイラ
媾合録

ウトウヤ
UTOYA

1 魔女ロジェスティラ

ロジェスティラという女がいる。

人里離れた森の中に塔を構えて魔術の研究に没頭する傍ら、時折依頼を請け負って薬を調合することで細々と生計を立てている、ごく普通のどこにでもいる魔女だ。

だが、ある経緯からその身は女にばかり情欲を抱かれ男には袖にされるといふ、女色の気がない彼女にとっては少々厄介な呪いに侵されているのだった。

今から語られるのは、そんな彼女とその周囲に纏わる、濃密な一幕。

◇



「ん.....ん.....んんっ.....！」

塔の最上階に、甘やかで切なげな吐息が響いた。

ロジェスティラが身の火照りを自分で慰めているのだ。

今、彼女は安楽椅子に腰掛け、上気した顔で自分の体を見下ろしていた。ゆったりしたローブの上からでもはっきり分かるほど豊かな両の乳房を根本から握るように揉みしだき、あまつさえその人差し指で乳首をくりくりと転がす。すぐに双丘の頂きがじわりとシミが出来て広がり、甘く濃厚な香りが立ち込めてくる。

「んうっ♡」

きゅっと乳首を絞ると母乳がびゅっと飛んで、ローブのあちこちに新しいシミを作った。眼鏡のレンズにまで飛沫が付いている。少しの時間差を置いて腰が小刻みに痙攣し、今度は股間から湿り気を帯びたすえたような匂いが昇る。様々な匂いが交ざり合って鼻孔をくすぐられ、盛り上がったロジェスティラはもどかしげに太腿を擦り合わせた。

「はあ、はあ、はあ」

ロジェスティラは乳房の片方を開放すると、その手でへそをなぞってそのまま股間に這わせ、閉じた太腿の谷底に浮かぶ不自然な突起につんと触れる。

「ひんっ!？」

ローブ越しに触れた恥丘が思わぬ刺激を齎し、びくんと身を仰け反らせ。

「.....♡」

むっちりした両足を手すりにかけて股を開くと、既に失禁したかのように大きなシミになっている股間を隅々まで丁寧に撫で始めた。

「はん.....あっ、.....んん」

太股の付け根を焦らすように滑り、そのまま会陰(えいん)をつるりと下って肛門の手前を何度もくすぐって、ひくひくと腰を振る。その間も乳房を愛撫する手を休める事はなく、溢れ出る母乳は今やローブ全体をぐしょぐしょに濡らし、いっそ艶を帯びるほどであった。それでいて膣も締まりない有り様で、めくるめく快楽に際限なく愛液を滴らせ、それが尻の方にまで伝う感触が更に淫猥な気分を促した。

「はあ、はあ.....んちゅっ、んむっ」

ロジェスティラは股間のシミをなぞってすっかり濡れた指を顔に近づけ、それを少しの間しゃぶった。けれどすぐに抜いて、名残惜しい顔で指にまみれた唾液をぺろりと舐め取ってから、もどかしげにローブの裾をまくり上げた。

魔女は下着をつけない。従って露わとなった股間を覆い隠すものは何もなく、控えめに生えた産毛と、恥丘から始まるヴァージンピンクの秘部がひくひくと痙攣しながら愛液を垂れ流している様が詳らかに窺える。

「ふふ.....♡」

ロジェスティラはそんな自分の痴態に笑みを浮かべ、涎にてらてらと光る手先をゆっくり股間へ近づけた。既に逆手は放置されて寂しがっているもう一方の乳房を愛撫し始めている。ぴぴっと甘く白濁した液がはねて、秘部を狙う指に当たった。それに気づいたロジェスティラは何を思ったか手を戻して母乳を舐め取り、かと思えば乳房に拭って余計母乳まみれにした後、今度はすぐ股間へと向かわせた。

「あひっ」

中指と薬指を一息に膣へと挿れた瞬間、尿道からぴゅっと透明な液体が跳んで、つい悲鳴を上げてしまった。焦らしすぎて我慢出来なかったのだろう、体中がひどく敏感だ。だが、たったこれだけで満足する筈もなく。ロジェスティラはすっかり柔らかくなった膣の中でスムーズに指を動かした。

「.....やん、あっ、あっ、はふっ、うんっ！」

内側を自分の指が刺激する度、歓喜の声を洩らす。全身が痺れて後から後から愛液が零れ落ちて、くちゅくちゅといやらしい音が響く。安楽椅子がぎしぎしと軋みながら身をこわばらせる主の痙攣をゆらゆらと和らげ続ける。

「ふう、ふううっ、んんっ、ちゅっ」

息を荒くしながら、豊かすぎる乳房を持ち上げて口元に寄せる。ローブ越しに母乳を舐め取り、乳首にキスして吸い付いて、自分自身を味わいながら、なおも忙しなく膣を責める。

「んっ、んっ、んっ、んんあ！ ああん！」

次第に声が大きくなる。誰もいないのをいい事に自慰を始めたくせに、これまではどこか恥じらいがあった。しかしそれも快楽には敵わず、声も所作も母乳も愛液も激しく乱れて、卑猥に腰を振りながら何度も何度も潮を吹き、様々な体液を撒き散らし、床に水たまりを広げてなお愛撫は続く。

「やああん取まんないよお~~~~♡」

彼女がこれほど乱れているのには理由があった。

それは遡ること数日前――。

◇

予め述べている通り、ロジェスティラは薬を売って糊口をしのいでいる。

魔女ならばいくらでも悪事に手を染めて暮らしを豊かに出来るのだが、そして彼女の姉達などはその意味でも典型的と言える悪名高い魔女なのだが、ロジェスティラ自身は至って善良で、みだりに人の世で波風を立てる事を好まなかった。

それに魔女が調合する薬は王侯貴族を始めとする富裕層に大層珍重されており、食べていけば充分すぎる稼ぎを得る事が出来た。

が、魔術の研究をするとなると話は別だ。

珍しい書物や希少な素材を効率的に入手するためにはどうしても大金が必要になる。後者に関しては自ら世界を探索して手に入れる方法も一応なくはないが、そんな事に時間と労力を浪費するくらいなら研究に没頭したいと彼女は考えていた。

そしてロジェスティラは食の貧しい暮らしを選んだ。その割には男好きのする豊満な肢体に翳りが見えないが、彼女はこれで健康に人一倍気を使っており、常日頃から豊かでなくとも粗末な食事にならぬよう心がけていた。

姉達はそんな妹の真面目ぶりをせせら笑う一方心配もしており、偶に顔を合わせれば王様を強請る方法だの羽振りの良い商家を乗っ取る方法だのを教え込もうとして、その度にロジェスティラに追い払われていた。

そういったわけで、ロジェスティラにはとにかく金が必要だった。

そんなある日、彼女に大きな転機が訪れた。